

5月18日（日）マルコの福音書2章15～17節

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」（17節）

---

イエス様は、レビの家で食卓に着かれましたが、そこには大勢の取税人や罪人と呼ばれる人々がいました。ある牧師は、イエス様は食事の交わりをととても大切にされた方だと言い、実際にご自分の教会でそれを実践しておられるようです。もちろん、それぞれの方々に事情もありません。食卓の準備を考えますと、なかなか食事の交わりも大変だと思いますが、私たちも可能な限り食事の交わりができれば感謝だと思います。

17節でイエス様は「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」と言われ、ここに「丈夫な人」「正しい人」が出てまいりますが、これは決してイエス様による罪からの「いやし」、すなわち罪の赦しによる神との関係の回復を必要としない丈夫な人や正しい人が世の中には少しはいると言われているのではありません。むしろ、病人が自らの癒しの必要を感じて、医者のもとへ行くように、癒しを求めてイエス様のもとへ行けば、イエス様はあわれんで癒やしていただけますが、自分は丈夫で正しいと思ってイエス様のもとへ行かなければ決して癒されないということです。さらに、イエス様は罪人を招くために来たと言われました。イエス様は決して病人であり罪人であるものの方から自分のもとへ来るようにと言われる方ではなく、あわれみによりイエス様自らが罪人を招くために、イエス様自ら神のあり方を捨て、人となってこの地上に来てくださいました。私たちは、そこに示された主イエス様の大きな愛とあわれみと謙遜を見ることができます。そして15節にありますように、実際に、大勢の取税人や罪人がイエス様の招きに答えて、ともに食卓に着き、イエス様に従ったのです。イエス様は、罪人を招くことをみこころとし、いつの時代も罪人を招き続けておられます。そして私たちも皆イエス様により招かれ、イエス様により癒された病人であり、罪の赦しをいただいた者たちです。そして、ともに主を礼拝し、ともに祈り、ともに交わり、ともに主に従っているお互い입니다。そして、まさに私たちが天の食卓に着く時には、そこには私たちと同じような招かれた罪人たちが大勢いて、ともに私たちの罪のために屠られた子羊イエスをほめたたえる恵みと祝福にあずかるのです。私たちも、この地上の教会においてそのことをともにおぼえつつ、天の祝福の前味である交わりを心から喜び、楽しみたいと思わされます。

パリサイ派の律法学者たちは、「なぜ、あの人は取税人や罪人たちと一緒に食事をするのですか。」（16節）と批判しました。それはイエス様がそのような人たちと交わることで儀式的に汚れることを全く気にしなかったからです。しかし、イエス様を通しての主のみこころは罪人を招くということであって、彼らの批判は的外れであり、神のみこころとはかけ離れたものでした。私たちもイエス様を中心とした兄弟姉妹の交わりに積極的に関わることを避ける何か理由があるのでしょうか。それを主はどのように見ておられるのでしょうか。

5月19日（月）マルコの福音書2章18～22節

「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入るものです。」（22節）

---

ここには読んでお分かりのように「断食」の問題が出てきています。本来、ユダヤ人にとって断食は、施しや祈りとともに重要な宗教行為の一つでした。（マタイの福音書6章1～18節）それとともに罪を悲しむときや災難など特別な祈りをささげる時にもなされていました。そしてイエス様の時代にはメシヤ（救い主）の到来や神の御国の到来を早める目的のためにも断食がなされていたので、断食をしないということは、救い主を待ちのぞむことに関心がないことを意味して、それは神への冒瀆とも取られていたようです。イエス様は直接18節の質問に答えず、「花婿が自分たちといっしょにいる間、花婿につき添う友だちが断食できるでしょうか。」（19節）と例えをもって尋ねます。もちろん答えは「できません」です。ここでイエス様は、ご自分が待ちのぞんだメシヤ（救い主）だとおっしゃっていて、救い主はすでに到来したので、救い主を断食をもって待つ時代は終わったということです。そして救い主が来た今となつては、断食するよりも、救い主が来られたことを祝うパーティーが持たれるべきだというわけです。そして20節で「花婿が取り去られる時が来ます。」と言われていますが、それはイエス様が十字架につけられる時です。皮肉なことにメシヤを待ちのぞんで熱心に断食していた人たちが、到来したメシヤを見失って十字架につけて殺してしまうことになります。その時にはイエスの死を悲しみ、弟子たちは断食をするとイエス様は言われます。

普通は、新しい布で古い着物の継ぎをするようなことをしません。そのようなことをすると古い着物がさらに破れることになるからです。また新しいぶどう酒を古い皮袋に入れることもしません。そうすると、発酵した新しいぶどう酒のせいで、古い皮袋が裂けてしまうからです。21節の「真新しい布切れ」22節の「新しいぶどう酒」は、メシヤがもたらした神の御国の福音のことで、「古い衣」「古い皮袋」というのはユダヤ主義を指します。ですから、これまでの古いユダヤ主義の教え、儀式、しきたりでは、イエス様がなされたことや彼のことは、教えられたことを理解することができず、矛盾を感じてしまいます。そしてイエス様の弟子たちには、パリサイ人がしていたようにしきたりとして形式的に断食するようなことをせず、むしろ自分の罪を悲しんで悔い改める心から、また自ら進んで自発的に断食をすることが期待されていました。

イエス様は私たちにも全く新しい生き方、価値観、生活を与えてくださり、まさに「見よ、すべてが新しくなりました。」と言える人生を送ることができるようになっています。それなのに、私たちは古い自分、古い生き方、古い人生観、古い生活の中で生きようとしていないでしょうか。そこに矛盾を感じたり、居心地の悪さを感じるのは当然のことです。私たちには真新しい布が与えられ、新しいぶどう酒が与えられたのですから、それを新しい着物、新しい皮袋に用いるべきなのです。

5月20日（火）マルコの福音書2章23～26節

「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか。」（24節）

---

安息日に麦畑の中を通ったとき、弟子たちが穂を摘んで食べ始めました。そのときパリサイ人は、「なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。」（24節）と非難しました。恐らくパリサイ人たちが根拠としたのは、麦の穂を手で摘むことは刈り入れることになり、それは特に安息日に禁じられている三十九の活動の一つにあたるということでした。それに対してイエス様は「読んだことがないのですか。」と二回繰り返しながら（25、26節）「ダビデと供の者たちが、食べ物がなく空腹になったとき」（25節）祭司以外の人が食べてはならない臨在のパンを、自分も食べ、また一緒にいた人たちにも与えた。」（26節）というのです。（サムエル記第一21章3～6節参照）つまり状況に応じてのさまざまな必要は、儀礼的律法にもまさることの証しをこの箇所は示していて、このことで誰もダビデを批判する人はいないだろうと言うわけです。

ここで私たちが注目すべきことは、パリサイ人たちは安息日に麦畑で何をしていたのかということです。麦畑でイエスや弟子たちを何をしているのか監視することが彼らにとっての安息日の正しい過ごし方だったのでしょうか。人のことよりも、まず自分が安息日を正しく過ごしているのかを主の御前に問われなければなりません。そしてもう一つが、イエスと弟子たちを非難したパリサイ人たちの心の動機です。ヨハネの福音書7章49節では、「律法を知らないこの群衆はのろわれている」と言い、彼らは律法を知らない人々を軽蔑していました。ですから、イエスの弟子たちも正規に律法を学んだことがないということで、馬鹿にしていたのだらうと思います。また律法を人を非難するために持ち出そうとしたパリサイ人たちの態度には考えさせられます。教会の中で人を厳しく非難する前に問われるのは、人を批判するその人自身の心の動機であり、まずは省みなければならぬのはその人自身です。そして、正しくさばかれる主にお任せすべきこともあるはずです。イエス様はそれに加えて27節で「安息日は人間のために設けられたものです。人間が安息日のために造られたものではありません。」と言われました。安息日は確かに聖なる神の制度です。しかしそれは何かの重荷や義務を人に与えるものではなく、また安息日が人を支配するのでもなく、それは人の利益となるために用いられるべきです。つまり安息日を守ることで、人が神の栄光を現し、神によりよく仕えるようになるべきなのです。特に安息日に神を礼拝することを通して、私たちのたましいが新たにされ、生き返らされる機会として用いるべきです。イエス様は28節で「人の子は安息日にも主です。」と言われました。人の子とはイエス様ご自身のことですが、安息日にイエス様ご自身が主としてほめたたえられ、崇められ、栄光を受けるべきなのです。そのために安息日が守られるべきで、誰かをさばくために安息日があるのではありません

私たちは安息日をどのように守り過ごしているのでしょうか。今も私たちの間で安息日の主であるイエス様が心からほめたたえられ、すべての栄光をお受けになっているのでしょうか。

5月21日（水）マルコの福音書2章27，28節

「ですから、人の子は安息日にも主です。」

---

イエス様は「安息日は人のために設けられたのです。人が安息日のために造られたのではありません。」（27節）と言われました。パリサイ人たちは安息日についての細かい規則を定めました。それは安息日を守らない可能性を極力避けることが本来の目的でした。しかし、いつの間にかそのような規則が、人に何らかの重荷や義務を与え、規則が人を支配するようになりました。むしろ安息日は人のために神が設けられたものであり、人の益となるために用いられるべきものでした。天地創造に安息日の起源を求めると、（創世記1章1節～2章3節）神が六日間ですべてのわざをなし、七日目に、なさっていたわざを完成し、なさっていたすべてのわざをやめられたように、私たちもなすべき務めを六日間でなし、七日目にはすべてのわざを後にして、その日を主にささげるために聖別して、主を礼拝し、交わりをし、奉仕をして過ごすのです。また「神は第七日を祝福し」（創世記2章3節）とありますように、私たちがふさわしく安息日を過ごす時に、神は安息日を豊かに祝福し、私たちもその祝福にともにあずかるのです。これが安息日の大原則です。今の時代にあっては、安息日を守ることに困難をおぼえることもあるでしょう。様々な事情のゆえに礼拝を守ることが精一杯とか、礼拝すらなかなか守れないということがあるかもしれません。しかし、私たちは安息日を守ることによる祝福と申しますか、安息日を守らなければ決して得ることのできない祝福もまたあることを知るべきです。

イエス様は28節で「人の子は安息日にも主です。」と言われました。人の子とはイエス様ご自身のことですが、神の御子であり、私たちの救い主であるお方は、常に私たちがあがめるべきお方ですが、安息日においてもイエス様ご自身が主としてほめたたえられ、あがめられ、栄光を受けるべきなのです。

私たちは安息日をどのように守り過ごしているのでしょうか。安息日の正しい理解のもと、私たちは安息日を主のみこころにかなったかたちで過ごしているのでしょうか。

5月22日(木) マルコの福音書3:1~6

「安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか」と言われた。彼らは黙っていた。」(4節)

---

イエス様は再び会堂に入られました。(1節) 恐らく大勢の人たちがいたことでしょう。そしてそこには片手のなえた人がいて、イエス様を訴えるために、安息日にこの人を直すかどうかをじっと見ている人たちもいました。本来、会堂には神を礼拝するために来るべきであり、常にその中心には神様がいます。しかし私たちの礼拝の姿を今一度思い返してみましょう。本当に私たちは神様だけに目を向け、心から神を礼拝しているのでしょうか。むしろ人がさばき合いをしたり、また口にこそ出さなくても人をさばく思いが心の中に出てきたりはしていませんか。神様は私たちがいかにも敬虔そうに礼拝をささげている様子に満足されるお方ではありません。むしろ礼拝をささげている私たちの心をごらんになり、それがみこころにかなっている時に喜ばれるお方です。ダビデは、「神へのいけにえは、砕かれた霊。打たれ、砕かれた心。神よ あなたは、それを蔑まれません。」(詩篇51:17)と言われました。私たちはそのような心を神の前に礼拝ごとに差し出しているのでしょうか。むしろ5節を見ますと「イエスは怒って彼らを見回し、その心のかたくなのを嘆きながら」とあります。むしろ私たちの心を見ておられるイエス様が、怒りをもって私たちを見回しておられ、そしてその心のかたくなことを嘆くようなことにならないように、私たちは毎週の礼拝を心してささげ、神様に喜んでいただけるような礼拝をささげたいと思わされます。

4節でイエス様は「安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか。」と問われましたが、それに対してはパリサイ人たちは黙って、何も答えることができませんでした。答えは明らかであって、彼らは答えが分からなくて黙っていたのではなかったはずですが、むしろ彼らは答えてしまうと都合が悪かったので黙っていたのです。

「安息日は人間のために設けられたのです。」(2:27)とイエス様は言われましたが、それは私たちの祝福のために主が設けられた日なのです。そう考えると、安息日が本当の祝福された時となるために、私たちはどのような心で礼拝をささげ、どのように安息日を過ごしておますか。

悔い改めることなく、そこを出て行ったパリサイ人たちは、片手の萎えた人の癒しを喜ぶことなく、むしろヘロデ党の者たちとともに、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めました。悔い改めない心はますます罪へと進んでいくことを思わされます。

5月23日（金）マルコの福音書3章7～12節

「すると、ガリラヤから出て来た非常に大勢の人々がついて来た。また、ユダヤから、エルサレムから、イドマヤから、ヨルダンの川向こうや、ツロ、シドンあたりからも、非常に大勢の人々が、イエスが行っておられることを聞いて、みもとにやって来た。」（7、8節）

---

「イエスは弟子たちとともに湖の方へ退かれた」（7節）とありますが、恐らく弟子たちと祈ったり、休む時間を持とうとされたのでしょうか。しかし、ガリラヤ湖にイエスがおられることを知って、病という人の力ではどうすることもできない問題を抱えていたので、それを癒していただくとして大勢の人々がイエスのもとにやって来たのです。聖書の時代と現代とでは、時代も違いますし、地域も異なります。しかし、当時大勢の人々が病で苦しんでいたように、今も多くの人々が、病や災害、紛争、貧困、精神的な病、家庭の不和やさまざまな人間関係など、自分ではどうすることもできない問題を抱えながら生きています。その中で、自分の弱さを自覚する中で、イエスに出会いたいと思っている人がいるはずです。そのような方々にイエスキリストの福音が伝わるように祈ってまいりたいと思わされますし、一人でも多くの方々の心が柔らかく、謙遜にされてイエスを求め始めることができるようにと祈られます。

一方で11節からは汚れた霊の反応が出てまいります。汚れた霊は悪霊やサタンと同じものと考えられますが、聖書の中では人にさまざまな悪影響を及ぼす存在として出てまいります。その汚れた霊が、みもとにひれ伏して、「あなたは神の子です。」と叫びました。これは汚れた霊がイエス様に対して礼拝をささげたというよりも、イエス様が自分たちを滅ぼすことのできる力があることを認めていたので、恐れあまりそのようなことを口にしたのです。その汚れた霊に対してイエス様は「ご自身のことを知らせないようにと、きびしく彼らを戒められた。」とあります。これはイエス様ご自身が神の御子であり、預言されたメシヤであることを知らせる時が来ていなかったことと同時に、このように悪霊や汚れた霊を通して誤解されるようなかたちでイエス様のことが伝えられるのではなく、イエス様のみわざを経験したものが神への感謝と賛美をもってイエス様のことが証しされ、宣べ伝えられることをイエス様がみこころとされたということなのでしょう。そう考えますと、今の時代は救いのみわざを経験した私たちがイエス様のことを人々に証しし、宣べ伝えていくことを期待されているということです。ですから機会を用いて、一人でも多くの人々に救い主イエス様を証ししてまいりたいと思わされます。

5月24日(土) マルコの福音書3章13～19節

「イエスは十二人を任命し、彼らを使徒と呼ばれた。それは、彼らをご自分のそばに置くため、また彼らを遣わして宣教をさせ、彼らに悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。」(14、15節)

---

なぜこの十二人が選ばれたのか、その理由は分かりません。特に、イエスを裏切ったユダが十二弟子の一人として任命されたことについては多くの人が疑問を持ちます。もちろんイエスは、任命時にユダの裏切りを知らなかったとは思えません。むしろ、「ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので」(13節)とあるとおり、ユダを弟子とすることもみこころとされました。そして、イエス様はユダを他の弟子たちと同じように愛され、彼の悔い改めを願って警告を与えられました。ユダ以外にも細かく見れば、なぜこの人たちが選ばれたのだろうかと思ってしまうかもしれませんが、あくまでも彼らはイエス様のみこころによって選ばれた弟子たちでした。ヤコブとヨハネは兄弟でした。そしてこの二人は「雷の子」と呼ばれる名がつけられるほど激情的な性格だったのです。アンデレもペテロの兄弟です。ピリポは物事を冷静に判断する人で、トマスはとかく悲観的になりやすく懐疑的な性格でした。そして18節に出てくるマタイは取税人でした。取税人は、常にローマ帝国の側に立って税金を集めていたので、人々から嫌われていた人たちでした。一方で熱心党员というのは、ローマからの独立を目指そうとする人々でした。つまり政治的には正反対の立場を取っていた人たちが、同じ弟子のグループの中にいたのです。普通であれば、ありえない人々の組み合わせです。しかしここで人々が一つになる可能性をさぐるならば、それは自分たちの好みや願いによって集められたのではなく、イエス様が望まれて選ばれたことにより集められたということです。教会にもいろいろな人がいます。男性もいれば、女性もいます。性格的に全く異なる人もいるでしょうし、さまざまな職業の人もいます。家族や兄弟でクリスチャンになっている人もいれば、未信者の家庭から来られている方もあるでしょう。しかしすべての人が神様の選びによって救いに導かれた一人一人なのです。ですから、違いの大きい一人一人が何とか教会の中でうまくやっとうと考えるよりも、神のみこころによって世から選び出されて呼び集められ、ともに教会生活を送る中で、一つとされていくことが主であって望まれている私たちであることを信じたいと願われます。

14節に、イエス様が十二弟子を任命された理由が記されています。彼らをご自分のそばに置くというのは、イエス様から訓練を受けるためであり、イエス様と行動をともにすることで、そのみこころを正しく理解したり、働きをするための良き備えをするためでした。それは宣教のためであり、また彼らに悪霊を追い出すための権威も与えられましたが、それも御国の福音の宣教のために主によって与えられたものであって、自分が勝ち取ったものではありませんでした。私たちも、もし主に仕えたいと願うのであれば、イエスから離れるのではなく、そばに置いていただかなければなりません。また、宣教へと遣わされる方は真実であり、必要なものをすべて与えた上で、私たちを遣わされます。その信仰をもって主のみこころの所へと遣わされ、そこで御国の福音を私たちも宣べ伝えたいと願われます。